

トゥキュディデス（前 460 年頃～395 年頃）

出生：「アテナイ人トゥキュディデスは、ペロポネソス人とアテナイ人が互いに争った歴史をつづった。」
(Thuc. 1. 1)。

罹病経験： (Thuc. 2. 48)。

将軍職歴任： (Thuc. 4. 104)。

トラキアでの地歩： (Thuc. 4. 105) →エイオン確保に成功 (Thuc. 4. 106)。

戦後まで生き延びた： (Thuc. 5. 26)。

アテナイの名門に属する：将軍職に就いていた、トラキアに金鉱石採掘権を有していた、
父の名前がオロロスであること←ヘロドトスによればオロロスはトラキア王の名前で、
ミルティアデスの妻ヘーゲシュピレーの父 (Hdt. 6. 39)。
→後世の伝承：(Plut. Cim. 4)。
→アテナイの名門フィライダイの一族に属し、有名なアテナイの指導者キモーン。
とは親族(一説では甥)に当たるとみられ、反ペリクレス派の雰囲気の中で育ったものと考えられる。

ペリクレスに対する評価は非常に高い： (Thuc. 2. 65)。

アテナイ帝国とその落日を目撃

- 一族のキモーンの追放（前 461-51 年：出生時）
- ペリクレスの全盛期（前 448-29 年：青年期）
- ペロポネソス戦争（前 431-404 年：同時代の出来事）
- デマゴゴスのクレオンの台頭（前 429-22 年：30 代）
- 将軍選出とアンフィポリス喪失と追放（前 424 年）
- アテナイ降伏と帰国（前 404 年）。
- 三十人政権と民主政復活（前 404-03 年：戦後の混乱）
- アテナイの復興（前 395 年ころ：死去）。

アテナイ敗北の原因：アテナイ内部の政治指導者間の内紛と民衆迎合が遠征軍への支援を滞らせ、内紛が国家の内部崩壊をもたらして降伏にいたったとトゥキュディデスは考えている (Thuc. 2. 65)。

執筆の動機：「筆者は開戦劈頭いらい、この戦乱が史上特筆する大事件に展開することを予想して、ただちに記述をはじめた。」 (Thuc. 1. 1)

→古代史の部分 (Thuc. 1. 2-23)：トロイ戦争もペルシア戦争もペロポネソス戦争に比べれば規模は小さい。

歴史叙述の目的：「今後展開する歴史も、人間性のみちびくところふたたびかつての如き、つまりそれと相似た過程を辿るのではないか、と思う人々がふりかえって過去の真相を見凝めようとするとき、私の歴史に価値をみとめてくれればそれで十分であろう。この記述は、今日の読者に媚びて賞を得るためではなく、世世の遺産たるべく綴られた。」 (Thuc. 1. 22)

演説について：「戦闘状態にすでにある人やまさにその状態に陥ろうとする人が、それぞれの立場をふまえておこなった発言について、筆者自身がある場で聞いた演説でさえ、その一字一句を思い出すことは不可能であったし、また他処でなされた演説の内容を私に伝えた人々にも正確な記憶を期待す

ることはできなかった。したがって政見の記録は、事実表明された政見の全体としての主旨を、できうる限り忠実に、筆者の眼でたどりながら、各々の発言者がその場で直面した事態について、もつとも適切と判断して述べたにちがいない、と思われる論旨をもってその政見を綴った。」 (Thuc. 1. 22)。

歴史記述のリアリティーの追求：演説の創作、ケルキュラの内乱の記述 (Thuc. 3. 69-81)、特に民主派による貴族派虐殺の描写 (Thuc. 3. 81)、シケリア遠征軍の最後の海戦 (Thuc. 7. 57-72) と遠征軍の壊滅 (Thuc. 7. 77-87)。

正確さの追求史料批判：「しかし、戦争をつうじて実際になされた事績については、たんなる行きすがりの目撃者から情報を得てこれを無批判に記述することをかたくつつしんだ。またこれに主観的な類推をまじえることも控えた。私自身が目撃者であった場合にも、また人からの情報に頼った場合にも、個々の事件についての検証は、できうる限り正確さを期しておこなった。しかしこの操作をきわめることは多大の苦心をともなった。事件の起るたびにその場にいあわせた者たちは、一つの事件についても、敵味方の感情に支配され、ことの半面しか記憶にとどめないことがおおく、そのためにかれらの供述はつねに食いちがいを生じたからである。」 (Thuc. 1. 22)

伝説の排除：「また、私の記録からは伝説的な要素がのぞかれているために、これを読んで面白いと思う人はすくないかもしれない。」 (Thuc. 1. 22)

前5世紀の知的流行：ヒポクラテスの医学の影響→前430～29年の疫病の症状の記述 (Thuc. 2. 49)、強論と弱論→メーロス対話 (Thuc. 5. 85-113)、ヘラニコスの年代記やヘロドトスの歴史叙述の意識的継承→所謂五十年期 (Thuc. 1. 89-119)、ヘカタイオス、イオンの神話系譜学や地域史→所謂古代史 (Thuc. 1. 2-23)、イオニアの天文学や自然科学→日食や地震の記述 (自然現象としてとらえる：前431年夏の日食 (Thuc. 2. 28))、迷信の排除→無数の予言の存在の指摘 (Thuc. 2. 8) や辻占ないに人々が群れる様を描写 (Thuc. 2. 21)。

年代記的な記述を守ろうとする：一年を夏と冬に分けて記述 (Thuc. 5. 26)、客観的年代の記述 (アルコン年やエフォロス年など)：開戦の年 (平和条約締結15年目、クリューシスの神職48年目、アイネシアスのエフォロス在職の年、ピュトロスのアルコン在職を終える4ヶ月前) (Thuc. 2. 2)。

公文書の引用：ニキアスの平和 (Thuc. 5. 18-19)。

優れた文学性と歴史記述の悲劇性が人々を引き付ける。

トゥキュディデスの問題点

- (1) **アテナイ中心主義**：ペルシアやイタリアなどの記述が希薄で、ヘロドトスほどの広がりがない。アテナイを中心とするエーゲ海世界に歴史の舞台を制限してしまっている。
- (2) **教訓史・歴史の循環**・・・人間性の不変性・古代の歴史叙述の一つの伝統をつくる。
- (3) **演説の挿入**・・・創作の分野に属する。